# 子どもから教わったこと

札幌市立大倉山小学校

森實　祐里

## 1　はじめに

若い頃は何も考えずに図画工作科の授業に取り組んでいたと反省している。大学では美術を専攻していたということもあり、同僚から図画工作科の授業について質問されることがあったが、明確に答えることがほぼできなかった。また、美術館鑑賞はほとんど行ったことがなく、興味がなかった。

そんな私が変わるきっかけを作ってくれたのは子どもたちだった。

そして、日本美術実践教育学会に足を運ぶようになったのは、今から十数年前からになる。初めは発表を聞きたくて参加していたが、今では、自分の実践を振り返り確かめることができる貴重な場となっている。

ここで学ばせてもらい、たくさんの方々と出会い、子どもたちと共に活動して学んだことを確認することができ、感謝している。尚且つ名誉ある賞を受賞できたことは本当に光栄である。

素敵な方々との出会いと一緒に学んでくれた仲間、そして学びの大切さに気づかせてくれた子どもたちに感謝を込めて、私が日本美術実践教育学会賞（辻田賞）を受賞するまでの歩みを振り返ってみた。

## 2　美術館嫌いから

### 三角山小学校時代

歩いて５分で行ける本郷新記念札幌彫刻美術館（以下、彫刻美術館）がある札幌市立三角山小学校に赴任したのは図画工作を学ぶ上で大きな起点となった。赴任するまで、この美術館の存在も知らず、一度も足を運んだことがなかった。

２年生を担任した時、生活科の校区探検で緑地へ探検にいった。そこに設置していた裸の彫刻に衝撃を受けた子どもたちが、落ちていた木の枝で退治しようとしたのである。この彫刻との出会いから、彫刻美術館を中心とした活動を１年間通して展開していくことになった。

(1) なぜ裸の像があるのか話し合い、近くに彫刻美術館があることを知った。

(2) 彫刻美術館に探検に行き、素晴らしいところであることを知った。

(3) 緑地の彫刻を退治しようとしたことを悔い改め、お詫びに野外彫刻をピカピカにしに行った。

(4) 彫刻をきれいにしたお礼に館長から彫刻美術館に招待された。彫刻美術館では館内を探検したり、彫刻の真似をしたり、楽しい学びの場になった。

(5) １年生と一緒に緑地でお弁当を食べた。この時、１年生は彫刻に興味を示さなかったことから１年生にも彫刻美術館の素晴らしさを伝える計画考えた。

(6) １年生のために特別教室に彫刻美術館を再現した。彫刻の絵を実物大にかいたり、学芸員になりきったり、彫刻の歌と踊りをつくって披露したりしながら、１年生に彫刻の説明をした。

(7) 研究会に向けて、ダンボールを使って粘土を作り、実物大の本郷新の彫刻をつくった。その他に、実物大の彫刻の絵をかいて説明し、参会者に彫刻美術館の素晴らしさを伝えた。研究会では当時、教育委員会指導主事であった阿部宏行先生が助言者であった。生活科での授業公開であったが、「生活科としての助言は苦しかった」と阿部先生が言うほど、図画工作科としての学びは大きかった。

(8) 彫刻美術館で開催された「土屋公雄展」を見に行った。ガラスの作品に感動した子が自宅でペットボトルを使って真似をして作品をつくってきて披露したことから、クラスみんなで、ペットボトルで土屋公雄の作品を真似て作品をつくった。

(9) 本郷新になりきり、自分の彫刻をブロンズ粘土でつくった。館長の計らいで、彫刻美術館に展示してもらい、子どもたちは大喜びであった。

(10) 雪まつり見学の後、雪像をつくりたいと言い出した。そこで、本郷新の彫刻を雪でつくることを思い付き、グループごとで活動することにした。手足の接着がうまくいかず苦労したが、トルソーの像を真似て、製作したチームがあった。館長をお招きしてお披露目をしたところ、よく考えてつくられていると言われ、子どもたちは大満足であった。

このように、１年間を通して彫刻美術館を舞台に活動を続けられたのは、子どもたちが次から次へと活動を提案してくれ、それを授業に組み込むことができたからである。子どもが探究的に学び続ける姿から、学びの連続性を考えるきっかけとなった。また、大人と違って子どもは同じことを何度も味わい、学びを深めていくことを知った。子どもたちにとって、この地域のよさを味わい、大好きな学びの場が増えたことも大きな財産となった。

何よりも館長を始め学芸員、職員の方々が子どもたち全員の名前を覚え、一人一人に声をかけてくれたことが私の活動の支えとなった。学年１クラスだったので、一緒に子どもを育ててくれた協力者であったのは言うまでもない。

それから３年後、３年生の担任になった時に、子どもたちに連れられて何度も彫刻美術館に通い詰めることになった。

３年生では社会科の校区を調べる学習で彫刻美術館に関するものがたくさんあることに気づき、そこから学習を展開していった。

(1) 校区を調べ、街灯にはめ込まれている作品タイルや緑地や道路に彫刻があることに気がついた。

(2) 近くにある彫刻美術館と関連があると考え、調べに行った。彫刻美術館の中にあるたくさんの彫刻と出会い、本郷新という彫刻家を知った。

(3) 友達と調べたことを交流し、たくさんの疑問やもっと知りたいことが出てきたので、再度、彫刻美術館に行った。

この時に、石膏でできたエスキースを壊してしまい、慌てて学校に戻った。その直後、当時不在だった館長から「子どもたちが彫刻美術館を嫌いにならないように指導をお願いします」と電話が入った。

(4) 彫刻を壊したことについて話し合い、彫刻にお詫びに行く計画を立てた。

(5) エスキースを壊してしまったお詫びに野外彫刻を掃除した。学芸員から「彫刻が喜んでいた」と聞き、さらに彫刻へ感情移入していった。エスキースは館長の手で修復されており、子どもたちは元気な姿に戻った彫刻を見て、安堵した。

(6) 改めて彫刻の心の声を聞きに行った。

自分でお気に入りの彫刻にインタビューをして、彫刻の心の声をレポートした。彫刻のポーズや表情から考え出された心の声であった。

(7) 校区の三叉路の真ん中にある「奏でる乙女の像」のことを思い出し、一人ではかわいそうだと話し合った。みんなで仲間

になって一緒に演奏するために絵をかくことにした。子どもたちは演奏したい楽器を選び、演奏している自分をかいた。そして、音楽を聴きにくる動物や虫なども背景にかいていった。この作品は野外に展示することが難しかったが、彫刻美術館内に展示してもらうことができた。その時には、奏でる乙女の像の写真を取り囲むようにして展示してもらった。

(8) 彫刻美術館の展示替えがあり、現代彫刻に触れた。本郷新の作品しか知らなかった子どもたちはその面白さに浸った。

(9) 自分達も現代彫刻に挑戦したいと言い出したので、「釘打ちトントン」の学習で挑戦することにした。

(10) 毎年、彫刻美術館で行われているサンクスデーにもっとたくさんの人に来てもらうための計画を館長から依頼され、校内にお知らせする方法を考えた。
サンクスデーには、保護者を連れて参加した子がたくさんいた。

(11) 展示替えがあったことを知った子どもたちの提案で、彫刻美術館に行くことにした。頭部だけの作品の展示だったことから、今までのようにポーズを根拠に心の声を聞くことが難しいと判断し、彫刻と一緒にやってみたいことをインタビューすることにした。

(12) 自分の選んだ彫刻にインタビューして、顔の表情から一緒にしてみたいことを考えて絵に表した。

(13) 自分のかいた絵を彫刻に見せたいと言ったので、みんなで自分の絵を持って彫刻に報告しに行った。

この1年間では子どもたちから彫刻美術館に行こうと誘われ20回ほど通うこととなった。同じ彫刻の展示しかしていないのに何回も行く必要がどこにあるのか分からなかったため、子どもたちから行くことを提案されるたびに、理由を聞いた。ある時、「彫刻に会いに行くのさ！」と答えられた時には子どもたちにとってただの作品鑑賞ではなくなっていることに面食らったことを覚えている。子どもたちにとって彫刻の存在の大きさを知り、自分自身も彫刻のよさを味わうことの喜びを感じ取ろうと努力するようになった。子どもと彫刻との関係から、「鑑賞で作品を味わう」という言葉の意味を肌で感じ、深く考えるようになった。

また、この時までは美術館は敷居が高く敬遠していたが、子どもたちによって、子どもも学校もそして私自身も身近な存在へと変わっていった。

この学習の展開は、総合的な学習の時間と位置付け、カリキュラム化をした。15年以上経った今も彫刻美術館と札幌市立三角山小学校は連携して活動が行われている。

翌年、私は1年生の担任となった。4年生になった子どもたちから1年生を彫刻美術館の案内をしてあげたいと提案があり、一緒に行くことになった。4年生は1年生に「どの彫刻が好き？」「なんて言っていると思う？」と問いかけ、見事なファシリテータとなっていた。1年生にとっては初めての彫刻美術館を4年生と一緒に楽しむことができた。

## 3　研究会に参加するようになる

2年生の彫刻美術館の実践について、DOME[1]という雑誌に特集していただいた。なぜ巻頭ページで特集されたのかは全く分かっていなかった。なぜならば、この時は鑑賞教育について何も知識がなかったからである。子どもがやりたいことを一緒に活動していただけという認識しかなく、これで子どもたちにどんな力が付くのか、どんな学びなのかは説明できなかった。子どもの作品、子どもの活動だけで私の説明不足を補ってきたからである。

この後、学習会や講演会、雑誌の投稿、学会での発表などたくさんの方から声をか

けていただいた。

最初の原稿依頼は１ページだったのだが、入稿した原稿は５ページになってしまい、修正にはご迷惑をおかけしてしまった。この時から書くことに苦手意識をもつようになっていった。

それでも、声をかけてくださった方々に相談しながら寄稿したり発表したりしていた。

当時は、美術館連携について注目されてきた時であり、このような連携、そして低学年での美術館鑑賞の実践はあまり報告されていなかったようである。

初めての研究発表では、高知大学教授の上野行一先生や宮崎県立美術館の奥村高明先生たちに声をかけていただいた。その時はお二人が何をおっしゃっているのか理解できなかったが、今思えば、「アメリア・アレナス」「対話型鑑賞」などのことを質問されていたのかもしれない。返答に困った時に、奥村高明先生に「このまま、実践を続けて、ぜひ報告してください」と言われたことを覚えている。翌年、奥村高明先生は教科調査官になられたが、活動の報告はし続けていた。

佐藤公治先生（北海道大学教育心理学教授）の研究室の大学院生のために実践の発表をした。この時に同席していたのが、当時京都芸術大学教授の福のり子先生であった。「あなたの実践は面白いわ。今度、京都で学ばない？」とお誘いを受けた。このお誘いを受けて学んでいたら、鑑賞教育をもっと深く知ることができたのだろうと今となっては後悔している。この時に、アメリア・アレナスを日本に連れてきた時のお話を聞くことになり、その存在を初めて知った。そして、鑑賞活動の意味を考えるようになっていった。

それから数年後、カルフォルニア州立大学の徳雅美先生と出会い、親交を深めることになった。マンガの研究をされていることから、４コママンガの依頼があり、子どもたちと取り組んだ。そのお礼に来札してくださった際、アメリアのこと、日本とアメリカの人種の違い、言葉の違い、美術館に来る人と授業の違いについて教えていただいた。ここで、美術館での鑑賞教育が日本でも盛んになっている理由を知った。

その後、教育美術学会、日本教育心理学会、地元札幌、秋田県や東京都などでの講演会などに呼んでいただき、実践発表する場をいただいた。彫刻美術館の実践や北海道ならではの寒さを生かした造形遊びなど、様々な発表をさせていただいてきた。あの頃の執筆や発表では、子どもが実践してきたことを伝えるのに精一杯で、根拠や裏付けなどは考える由は無かった。

いろいろな研究会に出かけるようになり、当時岡山大学教授だった大橋功先生と出会った。北海道造形教育連盟の研究大会には毎年のように参加してくださり、その他にも若い先生にお話を聞かせていただく機会を作ってもらい学ばせていただくようになった。

このような出会いは、全て子どもたちが紡いでくれたのである。

### ４　モナリザは怒っている

３年生の時に彫刻美術館で鑑賞を続けた子どもたちが５年生に進級し、再び担任となった。３年生の時から 15 名の転入があり、40 名となっていたが、学年１クラスであった。この年に、上野行一先生から「モナリザは怒っている」[2] の撮影依頼があった。

対話型鑑賞という言葉さえ聞いたことがない状態で授業を引き受けてしまった。上野行一先生や福のり子先生の本を読み、対話型鑑賞について勉強して臨んだ。

この時に、子どもが見たくなるような提案ができず、不安なまま撮影をした。子どもたちはたくさん意見を言ってくれたが、私自身の勉強不足のため、この時の撮影はお蔵入りとなってしまった。

彼らが６年生になった時に、再び撮影が

行われることとなった。子どもたちが絵を見たいという気持ちになるような提案をしたいと思ったが、対話型鑑賞では初発問が決まっていたので、それに従って授業を行った。子どもたちはたくさん意見を言ってくれたが、まだまだ意見を述べたかったと不満を漏らすほどであった。

この時の授業の様子は鑑賞教育の初心者向けとしてDVDブックになって発売された。

いくつかの大学の講義で使用していただいたようで、いろいろな方からお声がけいただくようになった。

「対話型鑑賞の人」と呼ばれるたびに、そんなに詳しくないことを自負している私は違和感を覚えた。

卒業前に彫刻美術館で「二つの作品のうち、自分ならどちらの彫刻をお薦めするか」という設定で鑑賞の学習を行った[3]。

子どもたちは「モナリザは怒っている」の撮影での活動で身に付けた対話を展開していった。作品の中に根拠を見出し、友達の意見を聞き、その意見も取り入れながら話し合いを深めていく姿があった。

この時、作品の題名は隠していた。今まで鑑賞の学習では子どもたちには作品から感じたことを大切にしてもらいたいと考え、彫刻美術館に依頼し、作品名は隠してもらってきていたからである。

「自分で題名をつけるなら、支え合うとか信頼かな？」と発言した子が、学芸員に走り寄り、題名を聞いた。「サーカス」という題名だと知り落胆していたが、「本郷新が伝えたかったことはなんだろう」と問いかけると、表情が明るくなった。

高学年にもなると自分で作品名を考えた時に、作者の考えが気になるようであった。作者の付けた作品名を伝えたときに自分のイメージが題名と繋がっていることを喜んでいた姿から、言語による共通理解の大切さを学んだ。また、作者の思いを知る上でも作品の題名の意味を子どもから教えてもらった。

題名を隠し通すのではなく、子どものイメージを大切にしながら、どのタイミングで伝えるのか、どのように作品と出会い作品名との関連性を考えていくのか重要だと知った。

## 5　「ゼロから学べる図画工作」[4]

北海道造形教育連盟の全国大会が終わって数年経った時、本の執筆依頼が舞い込んできた。大橋功先生の監修だと聞き、二つ返事で引き受けた。

「ゼロから学べる教科シリーズ」の企画・編集をしてきた長瀬拓也先生から概要を聞いた時は、自分の知っていることをまとめるだけだと安易に考えていたが、なかなか執筆が進まなかった。今までの実践を振り返ることとは全く違い、初任者に向けて分かりやすく図画工作科のことを説明する必要があった。そこで、もう一度、学習指導要領や指導書などを読み返し、大橋功先生には修正してもらったり相談に乗ってもらったりしながらなんとか執筆をしていった。

この本の執筆で、図画工作科のことを知ったつもりになっていたと気がつき、分からないことが多いことを実感した。

## 6　大学院で学ぶ

図画工作科の学び直しが必要だと感じ、北海道教育大学の阿部宏行先生の研究室の門を叩いた。

阿部宏行先生の調査[5]で実施率が低いとされている「造形遊び」のよさを同僚に伝える方法を考えることにした。以前より「造形遊び」の活動では他の図画工作科の活動よりも生き生きとしているように感じ、実施率を上げていきたいと強く思っていたからである。

そして、自分自身が「造形遊び」についてしっかりと説明できない状態だったので、「造形遊び」の成り立ちを知る必要があった。阿部宏行先生からたくさんの文献や元調査官の西野範夫先生、板良敷敏先生を紹介していただき、「造形遊び」について学んでいった。

阿部宏行先生が在職中に修了することができなかったため、引き続き、李知恩先生と花輪大輔先生に修論ではお世話になった。

先行研究では、子どもの様子を分析している論文はあったが、子ども側から「造形遊び」の価値について論じられているものは見当たらなかった。そこで、6年生の「造形遊び」の活動後にアンケートを実施し、子どもたちの考えを聞いたところ、「造形遊び」の学びを実感していることが分かった。この自由記述の回答から作成した調査項目を使ってアンケート調査を実施し、子どもの認識から「造形遊び」の価値について説明していくこととした[6]。

調査から、子どもたちは図画工作科のどの活動よりも「造形遊び」では友達との交流を強く認識し、「自己価値」を見出していることが証明されたのである[7]。やっと「造形遊び」の価値について、どんな力がついたのか子どもの認識から根拠のある説明ができるようになった。調査の項目や結果などでも子どもの力に助けられることになった。

このアンケートの文言を低学年用に適しているか同僚に見てもらったところ、興味を示してくれ、一緒に「造形遊び」を実践したいと申し出てくれた。そして、色氷を使った冬の「造形遊び」に取組み、子どもたちの学びを一緒に味わうことができた。これが、今回の受賞論文となった。

## 7　まとめ

私の教員人生は、子どもに誘導されつつ実践をし、子どもに成長させてもらってきたと言える。子どもと一緒に実践して分かること、子どもから学ぶことばかりであった。

今後も、子どもたちと一緒に活動する時間の尊さを噛み締め、この時間を大切にしていきたい。

一昨年度、福のり子先生が行った鑑賞フォーラムを試聴し、私の彫刻美術館の実践が注目された理由が分かってきたところである。

福のり子先生に、「私は鑑賞について何も分かっていなかったことが分かった」ことを伝えたところ、谷川俊太郎さんの「どこまでも問い続ける。いつまでも答えはない。」という言葉を贈っていただいた。

この学会賞を受賞したことで、学びが終わりではなく、学び続けることの大切さを痛感している。

注

1　2003,DOME,「もう一つのミュージアム」と「もう一つのスクール」, 日本文教出版
2　上野行一他 ,2008,「モナリザは怒っている」, 淡交社
3　森實祐里他 ,2016,「ゼロから学べる小学校図画工作授業づくり」, 明治図書
4　森實祐里 ,2010,「初等教育資料」『美術館との連携を図った鑑賞指導の事例』, 東洋館出版社 pp.54-55
5　阿部宏行 , 2017「造形遊び」が定着しない要因の考察 (1), 美術科教育学会誌 38,pp.1-11,
6　森實祐里 ,2020,「児童と小学校教師の「造形遊び」についての認識のズレ」北海道教育大学紀要第 71 巻第 2 号 pp.233-239
7　森實祐里 ,2023,「「造形遊び」で気付く児童の自己価値について , 北海道教育大学紀要第 73 巻 pp.197-205